

「時間とは」

3年 M.K

お金では買えないものとは何でしょうか。それは、時間です。時間は二度と取り戻すことができないし、買うこともできません。時間が無かったら、今も過去もそして未来という観点もありません。時間について身近な事でいうと友達との待ち合わせ、記録を計る時などさえもできないのです。ではなぜ時間ができたのでしょうか。

そもそも、大昔の人々は狩りなどをする際いつ頃に行けばいいのかある程度は把握していましたが現代の人よりは“時”に対して非常にルーズだったのだと思います。しかし、時代が変わるにつれ数学ができだんだんと時間に合わせて動くようになりました。

現代人の時間に対する考えは昔に比べ、敏感になってきています。学校へ行く時間や電車の発車時刻、テレビ番組のCMの時間などたくさんありますが、つまり私たちは時間によって動いています。

しかし、時間に忠実に動きすぎると「待つ」ということが出来なくなってしまいます。みなさんはなぜ歩行者信号に棒のカウントダウンがあるのか知っていますか。あれはみんなが「待てない」ということから設置されたものです。

また少しでもひまになるとスマートフォンをさわったり、テレビを見たりと常に何かをしていないと持たないような体になってしまっています。私はこれを私たちがやることにあふれているからだと考えます。SNSやテレビ、宿題などに時間を費やすうちに、少しでも時間があると何かをやりたくなくなってしまふのです。

また、私は場合によって時間の価値観が変化すると思います。例えば、テストの前だと一分たりとも無駄に出来ず、もっとほしいと思うのに対し、夏休みだと一日中ダラダラ過ごし、時間を全く気にすることなく過ごしています。また、走っている時は遅く感じるのに対して、遊んでいる時や話していたりすると時間はあっという間に過ぎてしまうというように、感情ややっていることに比例して時間を早く感じたり遅く感じたりするのだと思います。

私はこの感話を書く前にミヒャエル・エンデ作の「モモ」という本を読みました。この本のテーマは時間です。この本の主人公であるモモは年齢も素性もわからない女の子の浮浪児ですが、町の誰にも愛される子どもです。しかし、町の人々は時間泥棒である灰色の男たちに時間を貯金することをすすめられ、笑顔でほがらかだった人々はだんだんと時間に支配され雰囲気も何もかもが暗くなってしまいます。モモは町の人々の元気や笑顔を取り戻すため灰色の男たちの元に一人で行き戦います。最後は灰色の男たちから時間を取り戻し町の人々をふたたび幸せにしました。

私はこの本を読み、この町の人々とは現代に生きる私たちにそっくりだと思いました。「時間がない」「ひまがない」こういう言葉を私たちは毎日耳にし、自分でも言っています。時間どろぼうの灰色の男たちの存在もあながちまちがってはいないのかもしれない。

時間とは一体何なのでしょう。機械的にはかることの時間ではなく、人間の心のうちの時間、人間が人間らしく生きることを可能にする時間。そういう時間が私たちからだんだんと失われてきているような気がします。たまには何もしないでボンヤリとする時間をつくる

こと、そのような事も必要なのではないのでしょうか？